麻生路郎★主宰

川柳雜誌

創刊大正十三年・通卷二百五十二號

三月號

Pensoj flugas trans la laud-limon

No.252

續川柳講座（12）

麻生路郎

七七型の句に就て

川柳の詩型は大づかみに云つて、五音、七音、五音の十七音字であります。しかし、これでもまだ音數があまる場合があるので、時には七音、七音即ち七七型によつて一句に纏める場合があります。これを短句と呼んだり十四字詩と稱したりして居ります。明治四十二年に物故した小島六厘坊は川柳と詩形が違う以上、これを川柳と稱せず、十四字詩として全然別箇の詩とした方が穩當であらうと述べて居りますが、私は寧ろ從來通り、川柳の一形式として川柳中に包含するのが穩當ではないかと思ふのであります。それは川柳の生ひ立ちが前句附の附句の獨立したものであり、それ等の附句の型が時に振り替つてゐることから考へても、七七型も又川柳詩として取扱うべきものだと思考するのであります。そしてそれ等の例證としては「武玉川」に於ける多くの短句を川柳として取扱つてゐるといふだけで充分であります。しかし、十四字詩が川柳的內容から離れて別箇の詩型として出發するとすれば、それは問題が別であります。

私達は十七音字の川柳が、詩としてはこれほど短い詩型がないのに、これでもまだ音數が多すぎると思ふ時があります。それを無理に十七音字に纏めやうとすると勢ひ無駄な語彙を挿入することになります。例ひ一音字でも無駄な語彙を使用すれば、必ず句にたるみを生ずるものであります。こんな時に私たちは七七型の句によつて、それ等の欠點を補つたものであります。だから七七型は川柳の基本型ではなく、非常時型であると云ひたいのであります。

逃げれば逃がす寺の盜人
去られながらも片付けて出る
貰ひ乳とも知らず子はかむ
他人のやうな僧の兄弟
おも家で喰ふと喰へる麥飯

以上は七七型の古句の例であります。ぬきさしならぬ表現のうまみを味うべきであります。七七型としたために、內容に緊迫さを感じさせられるのであります。しかし、下手に七七型の表現をとれば句が理窟ッぽくなるものであります。無闇に七七型で作句をしない原因が、そこにあるのであります。

少しく今人の作を例示することにいたします。

博奕をやめて兄の跡繼ぐ　（六厘坊）
誰が賣るのか古着屋に袈裟　（美知夫）
犬がおびえた以上におびえ　（山川兒）
心覺えも筆で書く母　（葉光）
ねえさん冠りをとれば元旦　（水車）
下戸に依ましてワイ〳〵と春　（五健）
きゝてがあつて愚痴も嬉しき　（都留逸）
子を呼ぶ聲に外聞もなし　（飯山）
又も立派にたつた銀行　（露斗）
笑はぬ父に恩給がつき　（路郎）

句意は解說する迄もなからうと思ふので省くことにいたします。一句一句の持味をよく味つて見れば、これ等の句を特に十七音字に引き伸ばす必要のない事が判るでせう。

慶弔句のこと

慶弔句は私達の生活に大きな役割を持つて居ります。それは他人の慶びを自分の慶びとし、他人の愁ひを自分の愁ひとして句作し、これをその人に贈つて眞實心の交流に資する場合と、自家の慶弔に對してはそれ等の慶弔句が自祝と自慰の役目を果すからであります。

しかしながら、柳誌等に發表された慶弔句を一瞥するのに概して川柳味が稀薄であり、感激性に乏しい句が多いやうであります。

その原因として幾つかを數えることが出來ます。

假りに戰死が傳へられてゐた友人が突如として復員した場合、その驚きと欣びが、こんがらかつて、苦心すればするほど表現上に破綻を來たし、第三者から觀れば全くひとりよがりの句としかうけとれぬ句が出來上つたといたします。それは材料があまりにも生々し過ぎて、充分にこなし得なかつたことを證據立てゝゐるのであります。又その作家と復員者との親疎關係に起因する場合もあります。例へば友人の友人が復員した場合、その感激性は前者に比して稍冷靜となり、反つて彈力性のある秀句となることもあります。しかしながら親疎關係が薄れてゆくに從つて、感激性の失はれた普遍性の句となり易いことにも留意しなければなりません。と同時に、親疎關係が淺いのに其の間の區別を忘れたならば阿諛になつたり、虛禮になつたりすることもあるのであります。

次に慶弔句の四つの形體を例示し、參考の資といたしませう。

新婚のまんま二十と有五年　（一浪）

これは作者が友人の銀婚式を祝して詠んだ句であります。友人の家庭の圓滿さを二十五年後の今もなほ新婚そのまゝだと見たところに山があり、祝句の體をなしてゐると云へるのであります。

下積は今日も無事故の日をすごし　（綠雨）

この句には「勤續三十二年」といふ前書があり、作者の自祝の句であります。よくも三十二年も勤めて來たものだ、それにしても今日も無事故ですごせたことは有難いことであるといふ作者自身が平凡な幸福を嚙みしめてゐるやうなところに此の句の面白味があります。

砂手本さぞ勤むらん〳〵　（雅岡）

この句は私の長男ロンドンが、九ッで亡くなつた時に、

男女両性に作用する
プレホルモン
錠劑・注射・皮下
塩野義製藥

今は亡き作者から贈られた句でありますが、廿餘年後の今日になつても、感激を新たにさせられます。追悼句として上乘の作だと思ひます。

紺絣今はアートのために裁つ　（茂乃）

この句には「長男ロンドンを喪ひて」と云う前書があります。諦めやうとしても、諦めきれぬ自慰の句であります。アートと云うのは次男の名であります。句意は說明するまでもありますまい。以上四句のうち、第一、第三の句は他人の慶弔に寄せた句であり、第二、第四の句は自家の慶弔に對して自祝と自慰を表明した句であります。大體慶弔句は前述の四形式の範圍を出ないのでありますが、交際關係の親疎其他によつて濃淡深淺の味を出すべきであります。

慶弔句には又禁忌すべき言葉のあることも心得てゐなければ、豫期しない非禮とならぬとも限らないのであります。殊に、他を譬喩するのに、つまらない草木や昆蟲などは絕對に遠慮すべきであります。まして、皮肉を飛ばしたり、諷刺や揶揄は避けなければなりません。

譬喩の例句としては曾て拙吟に、

首相逝く
待つたなしの歩にさゝれたる
犬養毅

と云うのがあります。これは首相を將棋の駒に擬したのでありますが、この場合の首相は先づ飛車と云つたところであります。歩によつて飛車をとられた口惜しさをしみ〴〵と感じさせられたのであります。今一つは社會黨の書記長片山哲氏が首相に推された時、次の祝吟を打電したことがあります。

サア動きますと片山運轉手

颯爽として日本丸の運轉台に突立つた片山哲氏を想像することは實に愉快であつたのであります。しかし首相を運轉手に擬するとは、非禮も甚しいではないかと眞向から詰めよられれば謝するに辭がない譯であります。友人が電車の運轉手になつた時に、こんな句を贈つたところで、祝吟にはならないのでありますが、國家を動かす運轉手に擬せられたのであるから滿更惡い氣もしなかつたであらうと思ひます。こゝに川柳の面白味があるのであります。

谷孫六が亡くなつた時に、

きん坊も三途の川でからつけつ

と云ふ句を詠んだ人がありますが。イヤ、詠んだだけではありません。孫六の主宰してゐた「財の敎」と云ふ雜誌に「追悼川柳」として掲載されてゐるのであります。追悼どころか、これでは故人を三途の川まで引張り出して侮辱してゐるのであります。隨分澤山載つてゐますが、追悼川柳の體をなしてゐる句と云へば

逝く秋を押切帳の綴が切れ　（荷十）

位なものであります。これとても迫力は至つて稀薄であります。ただソツのない句であると云うに過ぎません。尤も故人との關係が深くなかつたので、コレ以上の句が詠まれなかつたかも知れません。

冬空へ烏一西高く飛び

と云ふ句もありますが故人を烏などにたとえることは避けたいものであります。

ゆく秋の落葉に寒く時雨する

なども、これが追悼句だとはうけとりかねるのであります。殊にゆく秋だの落葉だのといふ文字の羅列で構成したレディーメード式追悼句にはウンザリさゝれるのであります。

亘星西に落ち秋更に深し
亘星地に落ちて大地は冬となり
亘星落つ玄海灘の波靜か

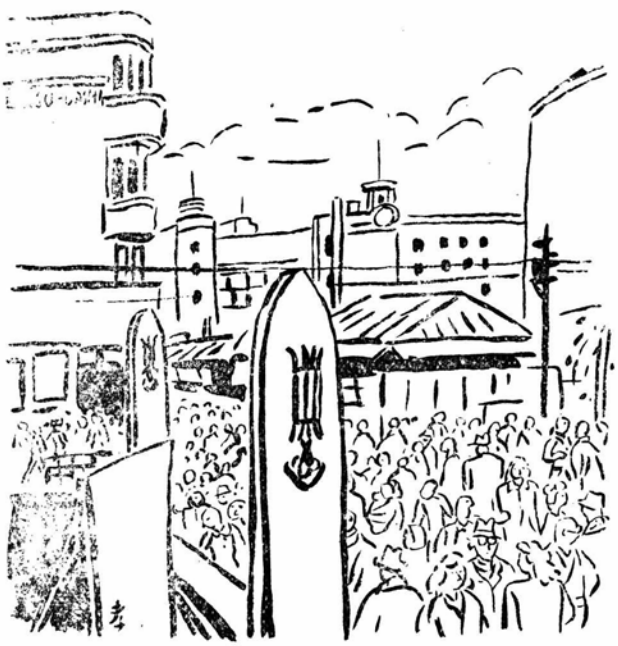
斯うして並べて見ましても、人の死に對して亘星地に落ちと云ふ表現が如何に月並であるかは想像に難くないでありませう。

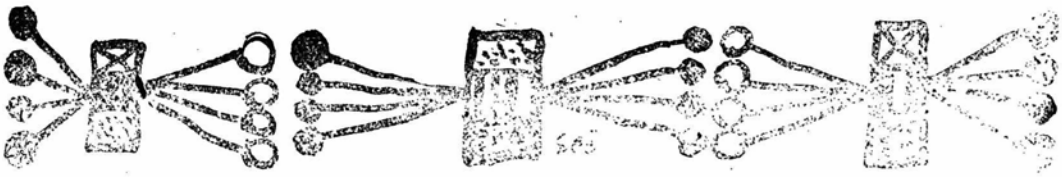
川柳新大阪

―田村孝之介畫―

戎橋

戎橋政令違反の灯が見える　豆秋
戎橋ダンサになろうかとも思ひ　同
OKと派手に別れる戎橋　栞
男うなづき女しやべつてゆく戎橋　同
橋筋で買うてはる人を見て歩き　生々庵
アベックとスリで橋筋もみ拔かれ　同
提げ鞄まぬけて見える戎橋　香林
愛の表現こゝぞとばかり戎橋　同
橋筋で燒かれた人と人と會ひ　路郎
スナツプの臨時支出も戎橋　同





馬齢五十童心さらす母を戀ひ　堺市　中島生々庵

どうせ月賦だらうと新築値踏みされ
島の内で二十余坪の地主さま

山中老ご逝去

お淨土で又あの帽子のし歩き　大阪市　武部香林

大晦日突つ張り欲しい人ばかり
バラックにちらほら紺ののれんを見
病人の冗談唇だけ動き
心地よきバウンド膝の旅行地圖
ミス・ポリス笛で叱つてくれるなり　兵庫縣　戸倉普天

喰ひ延ばしの米はしつかと壺にあり
空壜も下げて歸ると言ふ幹事　伊丹市　岩崎柳路

第二世の通譯さんと莫の火
千八百圓ベースの一人に帝大出
男女同權背廣の社員帶持ち

神戸所感

春の元町ネツカチーフに風があり　奈良縣　上田翠光

諦初め妻も眞面目に聞いてくれ
買うてやつてよかつた晴着着せて抱く
いゝ父になり切つてゐる三ケ日　旭川市　宮田不二

手袋の白さ校長やめられず
トンネルの煙へ佳人と窓を締め
配給酒一升びんを侮辱せり
電話口うかぶ彼女の眼鼻立ち
呑み過ぎのやれ胃病のと闇屋樣
御不幸があつて座敷の奥を見せ
眼で呼べば隣りの人の腰も浮き
闇を衝く悲鳴次週がお樂しみ　奈良縣　西垣錦風

東條を憎み賣喰ひの日が續き
月一で借りた金とは妻知らず
社は赤字社長宴會日が續き　横濱市　福田山雨樓

若人の惱みキリストかマルクスか
大阪の香をなつかしむ古雜誌
同居する若者と論して見たく
老妻病んでインフレの波拔手切る　尼崎市　水谷鮎美

世話好きをおだてるようによい天氣
幸福な顏がうつゝた社の机一
停電に灯もうつくしい京の雨
半分は戀のうれしさ川にすて　松本市　石曾根民郎

悲しみは人形の胸のかたさと似
停電へ冬柿舌をたのしませ
風車冬へおちつくいろをもち
珍客へとかく消炭手くらがり
手枕のわびしや貰ひ酒に醉ひ

病院生活

食塩注射みてゐる方で氣がつまり
水枕猫を提げてる樣に持ち
きぬこしを知らぬ少女と話すなり
水道の音して靜か大晦日　大阪市　竹内潮花

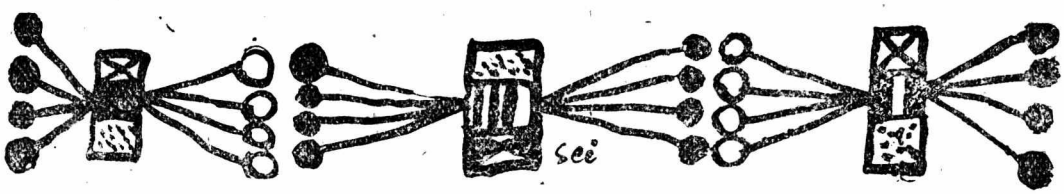
人の世に飽きず華燭の宴を張り
湯の宿の廊下がながいネネムーン
新宅も建てゝ農村冬に入る
姑の愚痴にも馴れて子が生れ　滋賀縣　北川春巢

聲明書讀まれもせずに雨に濡れ
學校の映画へ祖母もかり出され
買出しに觀光地圖が役に立ち
酒なしに何の誕生日かあらん
電力の不足を聞いてゐるこたつ
銀狐から口紅をチラつかせ　下關市　櫻川不水

インフレを嗤ふヤミ師の長火鉢
蓮ならぬ泥の女の紅い口　岡山縣　濱田久米雄

親と子の參考本がめくられる
天皇へカメラ持つ手がふるへたり
五十錢札がふまれたまゝちぎれ　奈良縣　尾崎方正

時間外叱られてから診てもらひ
筋道の通る話は敬遠し
氣の毒と思うてみてももつてゐず
外交は譬へ話をたんともち　大阪府　西尾栞



挨拶の物をもらつた聲となり
せやさかいにとゆるうしかられる
本代がもめる暮しとは哀し
腕を見込めば養子のめるなり
尾の方を食べで舅と仲がよし
七光ですと養子如才なし
もうゆづられる養子髭をつけ
雪の橋渡る俥は芝居めき
掃除婦と守衛の口の端に上り
鯨幕張り張り日本晴をほめ
添寢して父の無情を唄にする

大牟田市　高田抱逸

ウオルサムを肥汲さんが買つて去に
ストの裏無藝な俺は靴磨く
玉葱の涙乳房の遺兒へ落ち
夢でない解雇へ餓死はつきまとい

大阪市　村上角堂

ヨツク切れます青井下坂拔いて見せ

大阪市　木下幽王

電燈が灯けばランプのみじめなり
いぢらしさ吾子も薄給知つてゐる
淋しさを酒でこらへて又淋し
水ぐきうるわしく山猫ストにあひ
俗臭のこもる寢棺に入り給ひ
松の内早や米が切れ金が切れ
ふけをかく父ちやんの顏猿に似る
リンゴさへせせら笑つて僕を見る
還暦の頭丹頂鶴に似る

大阪市　橋本美奈子

レコードも買はず蓄音機もかけず
映画館泣いた同志の女が出

この上の慾は生みの子がほしい

出雲市　尼絲之助

呑んでいる時はうれしい霙なり
肋骨の高さよ春の温泉にひたり
醉ふている姿にあきれ醉ふている

大阪市　水谷竹莊

子歳の新年を仰ぐて
嬉しさは日本髪の三ケ日
新聞のカメラ裏門見のがさず
指定席夫婦ならんで五十過ぎ
中座から道頓堀はよみがへり

宇部市　國弘半休

御下問に誰れかふるえる聲がする

炭都宇部

大空を睨らむは煙突ばつかりか

蘆屋市　小澤史葉

無醫村で追放令が生きのびる
昇給辭令タイプライターの音もよし
停電の街どこからかチントンシヤン
縣道を眞直ぐ木炭車の煙
嫁きおくれ別に氣にせず附添婦
ローソクの奥から毎度有難う
文化史にカーバイトランプ一頁

大阪市　市場沒食子

氣が小さいばかりに運の方が逃げ
市民税さへも滯納してる今日
寒々と裸婦の像見る十二月
子を叱る値打が父のどこにある
保險滿期あゝ千圓の變りよう

大阪市　福田妄夢

戀愛の墓場にしてはたのしいね

北風よ吹け〳〵僕は働くよ

大阪市　須崎豆秋

十二月うちへ歸るが怖くなり
大三十日男をころしきいてゐる
たけのこに貯金をせよとおつしやつた
闇せよとお酒も五百五十圓
商相の曰く降らぬと點かんとさ
生駒さんへたばこも斷つて來なはれや
課長さんのライタカチ〳〵〳〵點かず
年の暮茶碗を投げたらしい音
本だけは賣らずにすんでお元日
たち直つたなと橋筋を振りかへる

元日當直

お元旦からかんてきをあふがされ
豚でさへ動物園で意張る世ぞ

○

西宮市外　鳥山一歩

君知るや雨の音さえ春うたう
人の世のレールを見たる一歩かな

白河　大谷五花村

亡き父母の年を遙かに越して生き
亡國にどうともなれの運不運
明日ありて生くる幸ある新日本

大阪市　橋本綠雨

働きに行く編上げがやぶけて居
ほれられた男消炭吹いてゐる
驛員の焚火改鋏してくれず

金澤市　安川久留美

繪双六名和も兒島も忘れられ
濱の砂けうは墨繪の松ばかり
松の内乍ら井だけの音

柳樽の選者

桃井庵和笛

冨士野鞍馬

万句合は寛政元年が最後となり、絶世の選者初代川柳も、名選者で親交のあつた木綿もなくなつて、三人コンビで續けてきた柳樽も、版元の星運堂花屋久次郎一人殘つて、あとをどうして續けてゆくかに相當苦心したものと思われる。いろ〳〵考へた結果、江戸中で當時人望、識見共に具備した前句の選者を求めて、新しくやり方を替へて柳樽を續けようと、先づ初代川柳に並ぶ程の人物を考へ、初代川柳直系の人に目をつけ、有名な人としては牛込の朱樂菅江であるが、この人は元々狂歌師であつて一寸學者風であるから一般向きがしない、山東京傳も川柳直系ではあるがこれは作者が本職であり、夢佛は雜俳の方であるし、前句專門で人望識見の人は桃井庵和笛を措いて他にないと決心したのであつた。ところで和笛とは木綿のように親交もなく近所でもないので、和笛を知つていた自分と同じ櫻木連の市中庵扇朝に話をしてもらい、それで和笛は承諾して、寛政六年の二十五編から選をすることになつたのであろう。この和笛を選者にたのんだのは、木綿が万句合から柳樽へ句選したのに對し、その選び洩れを拾つて分類したものを編んでいることを知つていたからでもあろう。和笛の分類句集は「古今前句集」として日本橋通油町蔦屋重三郎から寛政八年秋に出版されたが、その後柳樽の選を引受けてから懇意になつたので、享和元年に「柳樽拾遺」と改題して星運堂花久から出版することにしたのであつた。

和笛の人柄はわかつて居ないが、神田明神下に住んで居た事はたしかな樣である。安永頃の柳樽からその作品が見えて、廿五編の跋文には「笛老人」とあるから相當年寄であつた。あまり派手に前句師仲間と交遊も少く、コツ〳〵と万句合から柳樽拾遺の句選をやつて居て、權威もあり、一般前句師より地位も高い人であつたと想像出來る。二十四編の川柳追善「玉柳」の序に和笛と菅江、葉十の三人を翁の旧知として、その句會の選を三人が選をしているところから見ても、川柳の門人でなく並ぶ人であつたこともわかるのである。又廿五編の序文に「笛先生」といゝ「翁の選評にひとし」といゝ、「闇夜に往きて燈に逢へるが如く」と市中庵は述べている。「末摘花」三編（寛政三）四編（享和元）も和笛の選編ではないかとも思つてみたが、これはあまりたしかでない。「柳樽拾遺」の選編は、柳樽五冊よりも和笛の心魂を入れたもので、今に古川柳の寶典になつている。

柳樽の選をするようになつてから句を集めるのは、万句合から選ぶように簡單にいかないので、星運堂が句を集めたらしく、その題も前例のように十四字の題句を出して前句を集めて、雜吟らしいものを選んで收錄したものと思われる。隨つて星運堂の勢力で相當な作家が應募して、万句合のように景物や、まぐれ當りを目的とする連中は少かつたから比較的よい句が集つたと見られる。そして和笛は前の万句合に多く眼を通してい

沈默の一年

夷一笑

生。

先生は私の永い間の沈默にも不拘極めて自然的にたび〳〵お便りを下さいました。それから月々雜誌を送つて下さいました。

なぜ私はもつと早くお便りをしなかつたのでせう。實はこれまでにたび〳〵お便りをしようと思つたのですが、どうしてもペンが取れませんでした。それは決して先生、貴下樣にだけではなく四方の知己友人及び肉身のすべてにでした。私は近々七年、親爺の墓に詣つたことがない男です。けれども忘れて居るのでは有りません。いつも親爺のことは想つています。たゞ今後も幾年このまゝで居ようとも親爺も少しも氣にしないで有ろうと云ふ確心があるのです。こんな話第三者が聞けば、そんな馬鹿な確心と一笑にふされそうですが、そんな私ですからいくら便りを差上げなくとも先生は少しも氣にされないであろうと思つていたし、他の柳友も時に私のことを想ひ出して下さつている樣にも思つて一そう身近に諸氏を感じていました。けれどもこれはどこまでも一方的なものゝ見方考へ方でしか有りませんでした。よく言へばあまりにも思ひ上つた惡く云へばあまりにも人を馬鹿にしたづう〳〵しい精神になつてしまつていたのでした。一体どうしてこんな人間になつてしまつたのでせう。では沈默の一年をお話申上げます。

二十二年の春の彼岸でした。近く上阪しますからその折不朽洞を尋ねますと手紙で約して置きながら三月十九日上阪したのですが、時間の都合でどうしてもお伺ひ出來ず歸りの切符も入手出來ずそのまゝ神戸へまわり姫路へは夜遲く歸つて來ました。それから間もなく三月二十八日の夜半ひどい發熱で二十九日はそのまゝ床についてしまひました。早速往診された醫師から急性肺炎だと云はれ、すぐその手當にかゝる一方里へ行つてた妻子を電報で呼びもどしました。妻子の戻る一日前の日にやつとたのんであつた看護婦會から看護婦を一名よこしてくれました。この頃からよほど病勢は惡化していたらしく、それが夢うつゝの樣に思つていたのです。次の日に妻子の顔をぼんやりと眺めたきり、ほつとした思ひでそのまゝ何もわからなくなつてしまひました。四月の三日頃には醫師からも見はなされる程の重態となり二三日は生死の境をさまよひました。

子供がうるさいと云つて町の妹の家へあづけにやつたことや、子供に一目逢ひたいと云つて近所の人に町まで迎へに行つてもらつた

たからよい選が出來たといつてよいのである。穴を拾えば五冊の中から剽竊句と思ふもの五六は拾えるが、文化以後の選者のようなことはなく旁れていたことはたしかである。二十五編は前例にならつて表德なしで發表したが、句主の要求か、星運堂の商策か、廿六編から全部作者の表德を現はすようになつた。これが柳樽として作者名をつける始である。廿八編には羽州山形連の句を載せ、地方の句が現れたのもこれが最初である。斯うして新しい編み方に星運堂は苦心して毎編の序文を菅裏という表德で自分が書いて努力していたのである。木綿時代は万句合からの再選であつたが、和笛になつてからは純粋の單選であつて、これも從來ど著しいちがいである。和笛以後に一冊一人で選をしたものは三十七編の文日堂と三十五編の二世川柳とだけで、あと百六十七編まで全部數人若くは十數人が一冊の柳樽の選をしている。それが同じ集句を數人が選してそのまゝ發表されているから一冊のうちに同じ句が入選に應じて多いのは八回も現出しているということで、和笛以後の柳樽は佳句がないといつてもよい位である。又和笛以前の三十數年間に柳樽は三十冊しか出ていないのに、文化以後の三十數年間には百三十數冊もの多數が出ているところを比較しても、文化以後のものが嚴選でないことがわかる。殊に天保四年に版元が二代目花屋から市ケ谷の奎文閣に移つてわづか六年の間に四十六冊も出している。和笛の選句振は柳樽二十五編から廿九編までを讀めばわかることであるが、和笛の作句振を見ると、柳樽には十五編から二十四編までと三十一編に三十句ばかりしか見えない。その中から十句を拔いてみると、

ぬけ參りあかぎれいえて思い立
のめぬやつ餅のさしみを拵へる
長い目で見ている内に後家はらみ
松二本小だてにとつていひのべる
市以來息子賣切れ申候
金がなくなつて女郎に意見され
今近江ぐらゐを妾やたら彈き
木村あづかり大阪の冬角力
こも僧の出直して來る大さわぎ
さすがおく樣お花見のれだりごと

という句風で狂句はなく川柳直系の長所という風がうかがわれる。

柳樽で和笛にお馴染になつたのは老人になつてからであるから隨つてその活躍期間もみぢかく七年、五冊であつたが、柳樽として正に革命的の時に際し、終命まで努力してくれた功は木綿と共に感謝を贈るべき人である。その終命の日はわからないが、享和三年ではないかと思われる。文化二年丑六月一日に、淺草新寺町の三河傳來の鶯が鳴くという西光寺で和笛追善句會が盛大に催され、文日堂と窓梅とが選にあたつて、花久の菅裏も作句している。この時に文日堂は「川柳風」という雅號を掲げ以後ずつとこれを標榜して、天保迄柳樽に勢力を續けていることも注目すべきことである。こう考察してくると和笛を最後として柳樽は頽勢に傾いたといえる。

寛政年間は嚴しい、難しい時代で、柳樽も句の削除や入替を命ぜられた。その難關を和笛がうまく通過したことは、特別な功績であつたものとしてよい。そういう難時代であつたので花久は和笛をたのんだのでもあろう。明和、安永、天明の木綿と、寛政の和笛とは、後學として特に認識しておくべきである。

にきびとり
美顔水
東京天豊

ことなどぜん〳〵覺へがありません。けれども午前と午後の往診の外晝夜の別なく看護婦からうける一時間毎の强心劑の注射のいたみにほんの一瞬、我にかへる時はありました。そんな時何かしら虐待されている樣で、なぜこのまゝそつとして置てくれないのだろうかと思ひました。意識を取戻した時始めて苦痛を覺へ枕頭にサンソ吸入がシユウ〳〵香たてゝいるのをきゝました。のどのかわきを覺へ床ずれのいたみを感じたのもその日からでした。旬日の中にほゝは落ちひげはのび七十爺の老衰した樣な顏になり、しかし心は少年の樣な無邪氣になつている私でした。

リンゴ汁が冷たくて齒にしみるとだをこれたり床ずれのいたみを訴へては附添の人を困らせましたが人々の不眠の努力により日に日によい方に向つて行きました。が、それでもまだ體を動かすことさへ出來ず來る日も來る日も上を向たまゝじつとしていました。四月十四日長男が一年生に入學すると云ふので前日の十三日に次男も一緒に町から妹に送られてかへつて來ました。翌朝晴着をつけてせまい病室へはいつて來た長男に祝福の言葉をかけてやるのに息が切れそうで苦しくてとぎれ〳〵にやつとおめでたうを言つてやりました。

それから毎日午后になると子供等が森の草花を摘んで病室へ見せに來る樣になりました。戸外はもうすつかり春なのだなあ、れんげたんぽぽ、クロバーの白い花、かすかに花の香りがする、けれどもまだ晝夜の別なく二時間毎に取りかへる温濕布、氷枕もつゞけられ、間ぬくめの火もつがれていました。夜るが一番恐しく夜明けが一番嬉しく食事が一番樂しいものでした。ふだんから榮養のことをやかましく云ふ妻のことですからこんな時には出來るだけの獻立に喜々として馳走をつくりスプーンで一口一口食べさせてくれるのですがその都度罐筒からは妻の衣類が一点づゝ消えて行つたのです。よくそ魚肉を燒く匂ひが纖維のこげる匂ひに化けなかつたものと思ひます。

こうして一日二度の往診が一度になり、それもやがては二日に一度となり、三日に一度となつて行き、したがつて注射の虐待もすつと數を減じました。そうして四月の末日、もうよろしかろうとの醫師の言葉もあつたので看護婦に暇をとらせました。看護婦は最后の熱を計つてから一枚の温度表を病室にのこしてそうして自からの手ではりつけた北窓の目ばりを自からの手ではがしてお大事にと言つてかへつて行きました。温度表を見れば赤線は熱で青線は呼吸、黑線は脈搏でこれが入り亂れてその苦しみのあとを物語つていました。はじめは物價の樣に上昇をたどり、しばらくそれが平行を保てば次は少し下がり又上りして一ケ月の狂想曲が出來ていました。

數日前から左右に寢返り出來る樣になつていましたが五月に入つて或る日醫師の許しを得てはじめて妻に助けられ、そうつと床の上におこしてもらひ坐つて見ました。どうにか坐れましたが後ろからさゝへられている手をはなせばたちまちひつくりかへりそうで頭の血が下つて行く樣ないやな氣持で呼吸が苦しくなり十分程坐つて

近作柳樽

倍舊の御贔氣今年も闇屋です　大阪市千舟
羽根をつく音病人の氣に障り　同
大三十日夫婦茶碗の柄を撰り　同
寶くじ外れて榊も枯れてゐる　同
こつそりとダンスを習ふ奥座敷　同
眉ひいてピース賣る娘のこましやくれ　同
しばらくは手持無沙汰の電熱器　同
同情もされずにダンスホール燒け　同
喜多村の歳を囁やく指定席　同
怒濤今悲境の吾にくみすかな　宇部市栗美
語らひが一つになつたあゝ危險　同
映画雜誌が散らかつてる守衛室　同
社長の讃辭人間が機械になつた日　同
虚飾のない笑ひ米の配給日の妻　同
暗の夜なほ犯罪史つゞかんとす　同
善人の姿か老人飴を切り　同
地藏尊の足の側まで種をまき　今治市文庫
世に押され此處にこの人佗住居　同
恙なく普段着のまゝお正月　同
略式にやれと神様疎んずる　同
相手見て出す品がある屋台店　同
新築へ雀ねぐらを早や見つけ　同
インフレに社長の椅子は空きつゞけ　石川縣茶撫郎
新圓に慣れて女房の買ッ振り　同
あの頃のあれが戀かと丸くゐる　同
洋服へキセル短くなつてゆき　同
手の鱗柳で拭けば値がきまり　同
天才といわれる男フケだらけ　愛媛縣大八
それからは弟子の仕事と師匠寢る　同
學歴はナシ職歴が多すぎて　同
早春の素足を女愛しみ　同
春の夜をこゝわお通夜の灯がともり　同
道端の一錢ポンと蹴飛ばされ　廣島縣久行
二合五勺なぞあてにせぬ湯氣を吹き　同
役得が有りそうだ就職してみよう　同
民主主義ですよ晩餐盛りわけて　同
オトンボも着ました雜布にでもしませう　同
ちゆいんがむ五人の親がかんでみた　石川縣義風
弱いとこばかり目につき街をゆく　同
役得といふ不正さに何時か慣れ　同
ないとなれば此の大根が十五圓　同
胸算で先づこれだけのさやがあり　石川縣山々
闇市のぬかるみ路は踏んだゞけ　同
つんとした鼻へフチナシかけてゐる　同
置手紙鏡台冷たく光るだけ　同
薄情を憾んで乘つた告知板　下松市白星
陳情を待たし大臣畫にする　同

水谷商相

坑内へ大臣いやだともいへず　同
そのかみのお吉は泣ゐて身を委ね　同
あの時に買へばよかつた値の上り　石川縣醉羊
意見する老眼鏡は手に持たれ　同
もうけ話煙管を忘れて行きました　同
一寸ついたゞけで女のふくれよう　同
新しい疊儲けている證據　愛媛縣曉明
あつさりと親の氣持を子がしゃべり　同
計畫はこうでなかつた國庫補助　同
友情の端くれ程の金を貸し　同
延着の汽笛響いて荷を背負ひ　愛媛縣水鏡
鷄が餌を競う姿の配給所　同

いましたが屏風の画が動き出したので又そうつと寢かせてもらひました。次の日は窓を一杯に開けてそこへ座ぶとんを重ねて毛布を置き、かゝへられて窓のそばに行き、それでも三十分坐ることが出來ました。妻はこの間に素早く床を取りかへました。おゝ戸外の何と變つていたことか。二三寸であつた麥が尺余にのび、ここかしこに穗をつけている。私の植えた水菜がとうにたちかけている。彼岸に蒔たほうれんそうがあんなに大きくのびている。豆の花が咲ている。向ふの神社の境内の櫻も早や散つて葉櫻になつている。春はもう過ぎていたのか。何もしらずに冬眠していたのだ。私は戸外の景色に驚かずには居られませんでした。火花を散らしたであらう總選擧にも何の興味もなく棄權の止むなきに至り花の散るさへ知らぬ間に五月の微風は病上りのほゝに暖かでした。五月の中旬からはもう大丈夫だと云つて往診もなくなり隣の子供に二日目毎に粉藥水藥を自轉車で取りに行つてもらふ樣になりました。いつとはなく床に坐つて一人で箸を持つ樣になりました。五月末に妻の注意も聞かず、柱の下までいざつて行つて柱につかまりつつとう〳〵立ち上ることが出來ました。

六月に入つてから部屋をぼつぼつ一足一足歩ける樣になりました。やがては一人で厠へも行ける樣になり、六月の中旬には戸外へ出られる樣になりました。玄關から出て勝手口までこの小さな家を半廻するのにずい分暇がいりました。子供が見つけて大喜びです。近隣の人にこのざまを見られて笑止な顏でそれでも思つたより早う元氣になられましたと云はれました。ひげはのび垢はつもり六月の半ばだと云ふに綿のいつたどてらを着た私の姿を見知らぬ人が見たら氣狂だと思つたでせう。

こうして一時はあやぶまれた私もどうやらだんだんとよくなりましたが急激に皮をめくつて行つた筍は竹にもなれずその上二万余の借金が出來ていました。妻は一命を取り止めたことを喜び私は悲しみました。

七月の中旬になつてからどうやら自轉車にも乘れる樣になり風呂にも入れる樣になつたと思ふと又發熱して今度は扁桃線がはれ耳鼻科の醫師に往診を乞ひ自宅で手術しました。間もなく回復しましたが暑氣がこたへると云つては何もせずに夏中過しました。秋が來ればなにかしら冷たくて熱が出そうでびく〳〵しました。冬になつて

感冒 解熱に
Omnin
オムニン
コメット
黒田製薬株式会社

警官の變裝知つた人に會ひ　水鏡
醉つたなとおもふこゝの隙だらけ　東京都三星子
ねんねこで民生委員のうちをきゝ　同
この記者もむごいこと訊く授産場　同
憲法を言ひ出しそうな赤い唇　奈良縣美朝
全遞のストラブレターを遲らせる　同
織田作が好きで數學嫌ひなり　同
誘惑の街へ北風強すぎる　大阪市小雅子
師走師走越さねばならぬ襟をたて　同
檢問所大きなかもに逃られる　同
頑固もう通らぬ時勢を淋しく居　長野縣柳兒
恩人は闇屋となつても芽が吹かず　同
共稼ぎ束の間産月迫つて來　同
求職の濡れて玄關這入りかね　石川縣光郎
正札は一家の數へ高すぎる　同
船世帶一家の用は船で足り　同
新憲法添乳の間に讀んだゞけ　石川縣魯木
口論へ勝てそうもない京訛り　同
修道院又失戀が一人ふえ　同
密談へ火鉢一押しゆづられる　石川縣青豊
まゝごとも配給係にもめてゐる　同
縣人會幹事訛りで注ぎに來る　同
淀川の廣さになつてドグロ釣れ　石川縣味平
老眼は襦袢の先でぬぐはれる　同
繪看板ボケツの小錢ちやらつかせ　同
物資をひげの享主がおつばらひ　神戸市治男
交通のポリス磁石のやうに廻ひ　同
風呂へ行く姿素人になりきれず　同
親に似た所を親に叱られる　愛媛縣曉夢
餅米の話を風呂の内と外　同
切れかけた下駄はく樣な日をくらし　同
供米を出して淋しさだけのこり　津山市呑峰
此の指輪お米にしてもをこらない　同
お砂糖の仕舞どころを祕密にし　京都市巷歩
驛を出たとこへ闇屋は買ひまつせ　同
行先を切符で知らす友に逢ひ　石川縣貞人
男の子三ツになつて硝子割る　同
肉体を誇る女の鼻低し　高槻市丁路
腕力がものを言はずに乘り遲れ　同
煙草屋で買へる煙草を通りすぎ　奈良市晶平
母が預る父の煙草と子の煙草　同
ブローカー板についてる元華族　大阪府鬼八
頭から妻は月給あてにせず　同
無理もない事と仲裁耳をかし　津山市茂穂
吊り革へ今日の疲れをぶらさがる　同
荷造りをがんじがらめにする世相　大阪市旅風
スターの横顔家庭を撮される　同
生活の余裕を語る白い足袋　岡山縣七面山
一本の煙草を惠む幸福さ　同
穿けるだけ穿いたズボンの繼寂し　大阪市斜水
慾のため親友として交際し　同
貧しさを言葉にすれば堪えられず　岐阜市周峰
なぐさめる夫婦言葉を探し合ふ　同
心してつめや雀よ供出ぞ　岡山縣半仙
新妻のほくろ見付けてうれしがり　岡山縣正州
行幸で三年越の橋も出來　岡山縣凡羊
隱居部屋父はどうから咳ばらい　岡山市火峯
鶴嘴が並んで落ちる日本晴　岡山縣一葉
儲ければ馴れた食事によりつかず　神戸市凡太郎
故郷へ引揚げあれもこれも借り　下松市秋人
供米へ一番乘りの朝の色　奥市甦光
へそくりの一つや二つなんですの　大阪市良子
りんきしてお前らしいと笑はれる　大阪市葉榮子
あはて者なれど一家の戸主であり　大阪市三良
笑はない筈後は見合です　大阪市のぶを
賣大名つけ紙屑の樣に出し　大阪市桃村

からは一そうひどいもので夜は七時八時頃から炬燵にはいり朝は八時半頃迄起きられません咳が出ると云つては一日寢たりなどして毎日遲い朝食のあと夕方の四時までみじかい一日をそれでも仕事しています。石炭國營問題で議會がもめようと共同募金がはじまらうと師走が來ても驚くでもなくあわてるでもなく、のろい〳〵牛の歩みで落ついています。妻の妹が嫁入りしても、弟が結婚してもお祝はもとより一通のハガキすらかゝずにそのまゝでした。作句がどうしても出來ません。一番上阪したかつたのは先生の文化賞受賞祝念大會の報を見た時でした。一番つらかつたのは會費が未納になつていることでした。妻が氣にしてすぐ送金する樣によく注意するのですがどうしてもペンを握る氣持が出ないのは我乍ら幾度、もどかしく思つたか知れません。毎月柳誌は一字あまさず讀でいます。我が愛する「川柳雜誌」もすつかり内容が充實して來ましたので心から喜んでいます。新會員もどし〳〵殖えて行き、その作句も目覺しいものがあります。けれどもかほるさんと艸樂さんを亡くしたことは淋しさにたへません。かほるさんには昭和二十年の冬、四ツ橋線の市電の中でお目にかゝつたきりです。見なれぬ服にゲートルなど卷て居られましたが得意のセスチュアで少し話を取りかわしましたが、まもなく肥後橋が近くなり「僕常安橋でんれ」「さよか、あて北濱へ行きまんれ」と別れましたのが最后でした。艸樂さんとは廿一年の夏生駒の平群村での不朽洞會で逢つたのが最后でした。自作農園の知識をもつとつぎ込で頂きたかつたのに殘念です。アートさんの新しい住所をお知らせ下さいましたので早速、鼠はまだ生ていると知らせました。先生私いかに作句が出來なくとも寒ころは決して捨てませんでした。それは病氣と云ふ避け得ることの出來ぬ原因で一回休みとなりましたが又もとの振出へ戻つて上りと云ふ彼方を望むで精進します。先生や他の柳友先輩諸氏に御指導願つて一年生から勉强をやりなほします。永い冬眠生活から一年の沈默を破つて久しぶりにお手紙を書ました。

（一五ページへつづく）

伊賀・伊勢方面へは　のりば　上　六
河内・大和方面へは　のりば　アベノ橋

近畿日本鐵道

愛媛柳人記

東野大八

大陸から引揚て來て、まづ何よりも頼母しく思つたことは愛媛縣では川柳が殊のほか盛んだということである。勿論之れまで「川柳伊豫」をあちらで時折見ていたので大よそながら、かなりの柳人のいることは知つていたが、これほどの柳熱をあげてたくましい川柳群が存在しているとは正直なところ考へなかつた。私が海外から歸つて來てからこの二年間、縣下の大會は六回、そのうち五回までが廿二年度中に行はれたことなどは最もその間の實績を物語つていると思う。さてそうした柳熱のセンターを成す吟社と柳人の消息を以て路郎主幹の請に應じて一なでするることにしよう。

まづ吟社を離れてフリーランサーの大物には古川柳詳釋でおなじみの蛭子省二氏(喜多郡内子町)がいる。永年朝鮮の一財閥として羽ぶりのよかつた氏も終戰と同時に一轉してわれらと同じ泥だらけの引揚リユック組の一人に加つた。「むつみ」に六十居候の心境を語つた氏の最近は、依然として奥様と二人きりの落莫たる境涯がつゞいている。「何よりも惜しいのは朝鮮に殘した古川柳の文獻でした。」と氏の感慨を私は常に聽くところだが、その無一物の老軀を持病のセンソクに惱されながら「還暦のとにかくヘソのあかをとり」と氣慨だけはいさゝかも衰へを見せず、八多喜の大會では「私は古川柳研究家のように世間が言うが、私はあくまで作家です。」と述べたあたり、仙老の英氣、といつた感じを私は逢うたびに悲壯な側隠のうちに感じつゞけている。

つぎの柳人には前田伍健氏がいる。「五健の五の字につゝばりをつけ伍健で今一層大いにやるつもりです。」と聲明している通り老人の杖でなく心ばり棒を附したつもりの意氣は、依然として第一線大御所の貫録にはぢない。縣下の川柳界で伍健氏を忘れては、據つ氣のないおカユの如きもので川柳と伍健は正に一身同体である。よくあの齡であの細い身體で、釣魚の如きビチ〳〵した作句をするもんだ、と私は大會でいつも全点筆頭をとつてキヨロとした伍健氏の面つきのなかであきれている。この人も戰災者でいつも色の變つた黒の背廣と野球帽を着ている、伍健貳万年外裝だとみんな言つているが、「考へを直せばフツト出る笑い」御自慢の柳畫のなかへ書き入れる句にいつもこれが入つているのも味合がある。眞情美主義を掲げ瓢々乎とさまよい歩く伍健氏にとにかく私は「川柳」といふ特筆大書したハツピがひるがへつているのを常に意識している。

愛媛縣川柳交響樂團の指揮者としてタクトをとる伍健氏の精力的な柳熱にうたれ、各地の吟社に續々參加しつゝある新人合唱團は相當の數に上つているが、その養成所の運營に人一倍苦勞しているのが鹿の子の橋本迷峯氏(宇和島市)だらう。省二、伍健兩先輩同様この男にも金がない。川柳で勤先をクビになり、川柳で年中ヒー〳〵してウダツが上らないのもとはといへば川柳大明神の歸依信奉にほかならぬのだが、禦光尊とちがつてこの神様だけはと言つた信頼と抱負は、むしろ川柳氣ちがいを通り越して「川柳の鬼」とも感じられる。なけなしのキモノを賣り拂つて紙を買い鹿の子を印刷する、そんな仕事が何んの足しになるのかとアカの他人はその生活をいぶかつているが、きやり一家のこの迷峯、何言つてやがるといつた面付で「郷愁はだんだん輕い末袋」といつた川柳行脚の旅を追つている。彼から川柳を差引いたらたゝんだ提灯の如き存在だらうと私はいつも大眞面目で同情している。この迷峯主幹の下に鹿の子一黨はきやり調も充分に多士濟々の健吟家が揃つている。魚成華村、船田占魚、恩田句勞太、芝杏坊諸氏なぞは鹿の子のうちのトラの子級だらう。

宇和島から今度は松山に飛ぶ。こゝには純粹詩を掲げる山本耕一路氏の「あゆみ」がある。伍健宗匠のあゆみ語が名物だが、耕一路氏の句はそのかみの虻さんこと虹暦今は矢野赫堂氏とともにこの誌では異彩を放つている。傳統川柳はあきたらずとし、詩によつてのみ救いがあるとする耕一路氏の抱負は純粹詩であるだけ一寸戸迷いさせる句が多い。「墓の圍りに古びた瞳して貝のかけら」など一般柳人には憎れる句だ。赫堂氏また御同様「情熱の白紙ひろげて秋の月」といつた具合。愛媛交響樂團(ハープ)ではこの二人フルートか立琴といつた音色。川柳が大いなる人間の交響樂詞である以上、一慨にこうした句は反撥出來難い。が敢然とその信念につき進む情熱と勇氣は認めねばなるまい。何故なら來るべき川柳には定義がないはづだからである。そしてこれが滅びこれが榮へる約束がないからである。たゞ私は當面のこの御兩氏の傾向が今一息つゝこみ果されるものがあれば日本柳壇の新風はもつと華やかにならうということを期待するだけである。「三人の話二人になつて嘘」赫堂氏のそのかみのこの句を私は今もつて忘れないだけにこの人へは未練がある。そのほか松山には川崎百楠氏がいる、番傘同人であゆみ同人で「晴窓」を出している。しめやかで鋭いこの人の詩性がかへつて純粹詩ではなからうかと、時折耕一路氏に皮肉つてみたい氣がする。「義姉さんが讀む文字にして母へ書き」などホノ

嗜好

(はがき隨筆)

高鷲亞鈍

煙草が自由に買えるやうになつて、一日に四、五箱吸ふやうになつた。もとに戻つたわけだが、煙草代が二、三百圓いる。月の收入全部をあげても吸料に足らないから、手持の本が煙になつて消えるわけだ。高いと思うが家の土產には南京豆を五合ばかり買つて歸る。これが一合四十圓で二百圓、歸途の汽車の中で、そのうち二合位、ときに半分位はボリ〳〵やつて、はつと氣がつき、殘りを子供達に分ける。但しその五分の一は僕即ち父ちやんの割當として、當然とる。煙草についで、僕は南京豆を嗜好とする。それはぜいたくな嗜好であらうか。

—大阪・川柳評論家—

清談・商談
お待合せに、
喫茶 みどり
みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角

ボノとさせる句だ。

紙數がないから今度は今治行とする。こゝには「みなと」があり花岡鬼外、長野文庫、月原宵明、渡邊曉童諸氏の古强者が、粒よりの句を並べている。銀客の如き川柳熱の鬼外氏は俺の身體は川柳だという男だ。文庫氏は「商賣も大事、川柳も大事」といつも口癖に言つてのけているが、その二筋道にありながら川雜の卷頭ぶりは相當なもの、川柳一本なら底力がしれないということも言へる。

さてどんぢりに大濱水郷社へ持つて行かう。私が引揚て來てまづこの町に川柳會があることに氣をよくしたが、そのときは六、七名だつた。「今日までの危機ふりかへる子澤山」の今川の掠影、「三代に仕へいよいよ青い松」の未澤曉明、「あゝさよか大阪人の空とぼけ」の上甲可洲、「東京の廣さを思う靈柩車」の堀内曉風、「落ちぶれて部屋に余つた蚊帳をつり」の由利孝輔、その他酒井畝水武田京司、故花房南葉等々大した連中がヒツソリと柳誌も持たづ居並んでいた。私が最初の句會に出たとき、この連中は川雜系だな、と見てとつたが正に適中、擧つて川雜の常連投句家で路郎氏の「この鮎は藤樹先生のたべた鮎」の句まで一同が有難く拜誦している有樣だつた。今はこの六、七人が中心となつて四十數名、勢い余つて近くの八多喜へ本田水鏡氏がハミ出して矢野道健氏とともに河鹿川柳社を設けて廿名ばかりも社中がいる盛況だ。十一月から擧つて鹿の子吟社に入り大洲もどうやら動いて來たが、これからまだまだ伸びる所だと一同自負している。

ともあれ縣下各地には今數百の柳人が宇和島、吉田、大洲、八多喜、松山、今治、菊間、此吉井の八吟社により柳營相きそい立つているが、各吟社にはそれぞれ持味傾向があり、萬色味到の柳人群を形成してきわめて伸がよいことも自慢の一つである。と頼りなくこの邊で結んでおくが果して私のトク筆で縣下柳人を語り得たかどうか、とにかく路郎主幹のために責をふさいで屁のやうな柳人記を終ることにする。

句評　理生の生理

福田山雨樓

句は作者の息が通つてゐる生物である。優れた句ほど活動的な呼吸が脈々と觀賞者の聽診器に傳つて來る。句の生理をさぐるには、だから佳吟名句に觸れることだ。佳句は句と云うものの在り方を示し、その存立を主張する。佳句は生理を示唆する。句評も亦この觀点に立つてその生理を探らねばならぬ。

秋風へ蟷螂闘志なほ捨てず　柳兒

信州の山脈に蟠居する一方の雄、柳兒君の健闘も久しい、懐かしくも床しい。この秋風の賦は悲痛とも慷慨とも云へぬ諧調をたたえてゐる。蟷螂に擬して吾人の不屈な感懐をのべてゐるのだ。哀調のうちにわれらの琴線をゆさぶる所以である。リズムの薫高くタクトのさばきも鮮かである。

袈裟とれば何を憚る酒肴　鐵洲

鐵洲老の健吟ほゝえますにはゐられない。ズバリと云つてのけた達觀者の痛棒、その裏にうらぼんを通じて人生の喜悲劇が登場してゐる。諷刺もこゝまで來ると痛快である。宗教の萎微沈退今日の如きは稀であるが、これをなげきこれをかこつもの作者一人ではあるまい。

もの欲しげなる御佛の右手（ゆんで）なり　美瓜露

この獨斷、この主觀、この佛敎觀は極めて素朴である。慈悲を生命とする御佛を冒瀆する言葉であるかも知れぬ。けれども今日の道義のたい廢した醜体を見ては、神佛の存在も兎角人間から緣が遠い。さしのべる佛の御手も凡人の眼にはさもしく映るのであらう。この句は聖なる御姿を通じて人間の弱さ醜さを反射してゐるのである。

さるほどに火葬料まで値上（げされ）　豆秋

去る十月自分は子供を亡くした。その夜葬儀屋に交渉すると大枚二千三百圓。みすぼらしくもリヤカーで火葬場え運ばれた。燒場のインフレも天井知らずである。上五に作者の諦觀がこもり含蓄がうかがわれる。

こしらへてあとからたべてかたづけて　竹莊

自分は偶然この句と暗合の句を番傘の昭和十五年十月號で見付けた。大照演算子の「こしらへて後から食べて片附けて」と同じである。假名と漢字の交つたのが違うだけだ。されば竹莊君から潔よく撤回されることを望むが、暗合とゆう問題は殘る。僅々十七字の枠だ。類想は勿論のこと同想異句は所詮免れぬであらう。そんなことは恐れずに乘り越え踏み越えして自己の眞實を吐露すべきである。

鮎美さんへ

水谷竹莊

水谷鮎美さん。僕と同性だけに何んだか親類の樣な氣がしてなりません。知人から鮎美さんて、君の何にあたる人かつて尋ねられる事があります。それに、川柳は申すに及ばず芝居の好きな事、餘興に聲色をやるとこなんか、ほんとによく似てゐると思つて、微笑をきんじ得ません。兄の樣な感じがしますよ。聲色にかけては、さすが師匠だけの貫祿を示して、あの新年句會の、鈴ケ森や婚系圈等、うまいと感心しました。僕だけではないと思ひます。歸りに、一緒に、何かやりませうかと言はれましたが、近い内に師匠と豆秋さんに演出をたのんで里十九兄や不朽洞會員の芝居好きな人に集まつて貰つて、路郎先生の還暦祝に情緒豐かな歌舞伎か、新派を演じ樣ではありませんか。

余地餘地

いのちある句を創れ

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先本社

本社川柳忘年大會（大阪）

於・一運寺
二二・十二・十四

暮にしては案派らしい川柳日和であつた。吉例によつて川柳忘年大會を一運寺で開催した。滿場立堆の餘地のない盛會ぶりである。この日は忘年の集ひの意味から川柳三分餘興七分と云ふ振れ込みだけに人氣はいやが上に盛り上つた。鳥取から八步氏、岡山縣から風來子氏と云ふ珍客もあつてうれしい會だつた。前例にない川柳人ばかりの藝能大會では八步氏が東北から北陸、山陰へかけての民謠に火蓋を切つて、竹莊氏の聲色、万よし氏の忠臣藏、次いで鮎美氏が飛入で啄木の歌の朗詠、美朝氏の物眞似、市電一派の音曲と漫才、最後に遞信病院川柳會の川柳劇（竹莊・沒食子・史葉・斜水・秀天）が演じられた。餘興の一等は漫才、二等は音曲、三等は物眞似で賞品授與を行ひ日沒後朗らかに散會した。（幹事記）

出席者＝路郎・風來子・治男・充夫・美朝・小雅子・圭井堂・鮎美・豆秋・妄夢・丁路・翠光・六文・梅里・竹莊・綠雨・美奈子・良枝・光治・吸露・陽人・八步・千舟・幽王・茂・紫香・里十九・斜水・葉平・史葉・秀天・小松園・千里・政治・柳駒・万よし・白峯・生々庵・醉月・啓陽・万千子・系之助・和朗・古田・山本・北星・葭乃・一步

兼題「垢」　麻生路郎選

赤ん坊の垢大仰にふきとられ　竹莊
肝心の所手垢で讀めぬなり　丁路
近所からまゝ子の垢をいたわられ　圭井堂
靴磨き子供の垢と思はれず　小雅子
耳垢をほぢくる時の無我の顏　幽王
逢曳の彼氏は爪の垢を取り　妄夢
病には勝てず麗人首の垢　生々庵
市ケ谷の垢を熱海の湯で流し　葉平
首の垢笑へば笑ふ靴磨き　千舟
童心を捨てた手垢で靴みがき　美朝

兼題「催促」　須崎豆秋選

催促が來るだけ來たらお正月　斜水
催促は佛心をぬきにする　はるを
催促に來て山茶花の花を褒め　小雅子
催促に行けばお酒に迎えられ　北星
催促にきれいな返事延ばす氣か　系之助
催促に來て世間話につれこまれ　はるを
催促を女の前でされてゐる　綠雨
催促の先手を打つたくすりびん　圭井堂
酒が出て催促せずに戻つて來　紫香
いつ產むと催促に來る里の母　革郎
人傳てにした催促へ腹を立て　沒食子
催促もようせんくせに金を貸し　密彥
催促にいてたけのこを慰さめる　豆秋

兼題「ミス・ポリス」　中島生々庵選

ミス・ポリス初の手柄に目が潤み　丁路
ミス・ポリスM・P・にウインク返す　風來子
ミス・ポリス官服のはち切れそうな　千舟
ミス・ポリスひげの違反に一すてれ　はるを
ミス・ポリス迷子の良きママとなり　醉月
ミス・ポリス薄化粧して居てこわい　六文
ミス・ポリスやはり樣子をして歩き　醉月
ミス・ポリスうつかり同情して仕舞ひ　小雅子
ミス・ポリス制服脫げば戀に泣き　美朝
ミス・ポリスやはりかくれてコンパクト　千里
ミス・ポリスやはり年頃と云ふ手つき　系之助
ミス・ポリス叱られてみたい綺量のミス　翠光
ミス・ポリス火のつく嬰兒もてあまし　梅里
ミス・ポリス訊問して涙ぐんでる　竹莊
ミス・ポリス家庭では酌させられる　紫香
ミス・ポリス暗闇はやつぱりこわい　密彥
ミス・ポリス闇市をスツト抜けゆく　秀天
ミス・ポリス迷ひ子へ何か買はてる　史葉
ミス・ポリス君と語る笑顏は別な　翠光
ミス・ポリスおねーちゃんとよばれて困る　豆秋
ミス・ポリス手眞似でもさす交叉点　竹莊
ミス・ポリス醉どれをさけて通つた　光路
ミス・ポリス母の氣持で云ひ聞かせ　丁路
ミス・ポリスポリスとしてのコンパクト　生々庵

本社新春句會（大阪）

於・一運寺
二三・一・十一

新春はなんと云つても朗らかだ。川柳の道場一運寺のアトモスフエアは川柳人ならでは味へない。各選者が懸命に選句の中に、川柳人の餘興がはじまつた。葉平氏が「摺切れたレコード」と題して明治三十三年以來の流行歌を解說すると共に一々歌つて喝采を博した。次いで香林氏が「私の川柳生活」と題する漫談。最後に鮎美氏が歌舞伎十八番の戻り橋と、幡隨院長兵衛、鈴ケ森の場を自ら析を入れて獨演し、五時過ぎ盛會裡に散會。

出席者＝路郎・古方・錦風・鮎美・正則・わたる・葉平・香林・治男・紫香・豆秋・美朝・綠雨・美奈子・晴峯・野介・楠水・木聲・幽王・烏莊・詩朗・梅里・嶺泉・翠光・宇三郎・潮人・陽人・亞鈍・文子・立美・松夢・竹莊・小松園・克己・彌・栞・裸木・生々庵・白柳子・忠一・醉月・千舟・葉光・普天

兼題「放送」　麻生路郎選

玉音の放送バタツト箸を置き　錦風
放送の恩師へ妻も來て座り　翠光
放送へお弟子を前へならばせる　古方
マイクロホン我子も聞いてゐる意識　白柳子
放送はと切れて暗い飯を食ひ　裸木
接戰になつて放送ぷつと切れ　美朝
世界に告ぐとはある聲が流れだし　葉平
放送のおとぎ話しに外は雪　潮人
ラクビーの放送アナの舌もつれ　はるを
放送のと切れて急に部屋さむし　野介
マイクロホン我子も聞いてゐる意識　立美
好きなプロ客が來なけりや電氣來ず　栞
デマ放送やがなと且那内へ入り　栞
文樂になつたラヂオへ父を呼び　翠光
變骨で第二放送ばかりきゝ　豆秋
全波機へジープ故國を懷かしみ　立美
あの聲が我が子殺した東條か　醉月
灯がつくとラヂオさよならさようなら　豆秋
放送劇僕はト書を讀む役さ　古方
ダイヤルを廻し恩師の聲を待ち　千舟
社長放送ごの工場へも觸れが來る　普天
付いて行く母もうれしい馬場町　わたる
勝太郎お顏も見たい聲を出し　烏莊
放送の埋ぐさとなるベトウベン　香林
放送と聞いたにたつた十四分　路郎

兼題「荷造り」　武部香林選

抜きとられ荷造り不備と叱られる　木聲
荷造を解いていり豆添へてやり　嶺泉
見る人が見れば荷造り見破られ　生々庵
榮轉にはずむ荷造下女の指揮　木聲
男まさり兄にかわつて荷を造り　美奈子
母からの小荷物紐の節多き　松夢
荷造りの目出度いことを云ふて發ち　鮎美
荷造の山再開の海を越え　梅里
再建だちよつぴり初荷も出來上り　楠水
荷造りを解いてもみじみ故郷の香　野介
小包へ包み切れない母心　翠光
荷造りへ男の力少し借り　紫香
荷造りに自信があつてまだ下場　小松園

版寫謄田阪

大阪市北區芝田町二五

株式會社
阪田商會

電話福島一三六九番

荷造りを解けば田舎の親は良し　亞鈍
荷造りのせいにしてゐる郵便屋　岡王
荷造りのゴミも嬉しい初仕事　潮人
荷造りは斯ういふ風にと授けて見せ　香林
寒の入り親孝行の荷を結び　同
荷造が上手キヤビンで貰めたり

兼題「砂糖」　黒川紫香選

お砂糖のありかをかへる子澤山　栗
本箱の底に砂糖が見つけられ　鮎美
嬉香の樣に砂糖を入れて見せ　生々庵
キューバ糖又家中でわけておく　葉平
風邪の子に少しなめさすキューバ糖　栗
配給のかへりになめるキューバ糖　白柳子
お砂糖のありかチヨイ〳〵妻ばかへ　栗
お正月紅茶に砂糖いれませう　錦風
差向い砂糖のとけるのをみつめ　翠光
配給の砂糖すき癖する氣なり　亞鈍
ぜんざいが今年はあまいキューバ糖　豆秋
子澤山包んで砂糖渡すなり　鮎美
來客の豫定をしとく砂糖壺　紫香

席題「通信教授」　木下岡王選

通信でおぼへた刺繍これまわし　晴峯
通信教授ビル全体の廣告し　野介
天井は低くて通信教授の灯　鮎美
講義錄ちらす淑女を見る　正則
立志傳通信教授から知れ　香林
其處までは俺も知つてる講義錄　翠光
肉筆で添削送り返される　古方
通信教授忘れた頃に送つて來　裸木
講義錄送り忘れたまゝになり　正則
通信教授大先生の名を連れ　香林
通信で縫も知らずに教へられ　豆秋
通信教授の免狀ちらと持つてゐる　竹莊
通信教授訪へば長屋の奥の奥　陽人
通信教授大先生の名を連れ　岡王
三行綱通信教授のもうかりそう　わたる
妻あり子あり通信教授を讀み　岡王
分らないまゝに次號が追つて來る　陽人
通信教授讀でる窓から月が射す　岡王

席題「注射」　水谷竹莊選

注射器の藥の量を横目で見　紫香
豫防注射へ瞳を閉ぢ奥齒かみ　翠光
注射して來たまに云はず手で押へ　潮人
パンパンも注射は普通の額で受け　岡王
看護婦の注射は効かぬ氣もするが　豆秋
注射して醫者は子供にきらわれる　晴峯
配給をとめると云はれ注射する　梅里
看護婦の注射は痛いものときめ　潮人
親の慈悲カンフル一本にかゝつてゐ　松夢
注射せぬものは乘車を斷はられ　はるを
痛とまつか注射の順をまつてゐる　古方
カンフルを打つ醫者の手は見つめられ　わたる
腕まくりしい〳〵注射をのがれに來　紫香
代診の注射がいたい女の子　正則
注射した腕を二三度振つて見せ　小松園
この注射助かつてくれまくら元　正則
最後の注射拜んで母の顔を見る　生々庵
注射陣誰れも初めは逃げたがる　う冠り
ぬくうなる注射を今日もして　葉平
どうにか注射でもたす二三日　同
注射器を見ると子供はワツト泣き　晴峯
配給の止まる注射へ列になり　詩郎
一列寒く注射の順を待ち　豆秋
一家無事豫防注射もすんだ晩　鳥莊
醫者に刺れ注射に馴れて青い顔　美朝
注射一つへ玩具も一つふへ　栗
カンフルへかたずをのんだ枕許　翠光
小兒科は注射器おもちやの樣に出し　松夢

席題「ホルモン」　互選

どす黑いものを炊いてるホルモン屋　紫香
ホルモンは宣傳の方が効いている　立美
ホルモン料理日一日になつてくる　白柳子
ホルモンの不足をかたる赤ら顔　晴峯

奈良縣下

於奈良女高師内　佐保會館　新春川柳大會

川柳雜誌社大和支部、川柳むつみ社共催、縣文化課及奈良市協賛、奈良日日新聞社後援の「新春川柳大會」は一月四日午前十時から奈良市佐保會館に於て開催され來會者百二十六名出句數三千六百餘句、縣下は勿論京阪神方面からの參會者が場に滿ち、山口縣、東京、新潟縣、北海道等の投句者二十一名を加え、二十年前の顔なじみに、或は肯つて戰友だつた人との奇遇に語り合う友情の美しい花が所々に開いて、川柳家の集いらしい明朗な温さのうちに上田翠光開會を宣し、午後三時より、兼題の發表があり、飯降梅子氏の「狂言と川柳」麻生路郎師の「奈良と川柳」で奈良の史實に不案内の人々に川柳を通じて味う風味ある講演があり、小林縣文化課長や橋本市觀光課長及び北村奈良日日新聞編集次長からの激勵の辭があつた後、入賞者を發表、縣市並に若草山保勝會から寄贈の賞品を授與、深井凡々氏閉會の辭を述べ午後五時盛會裡に散會した。會後路郎師を中心に、有志並びに縣市の小林、橋本兩課長、北村奈良日日編集次長等と座談會を開催して大會の幕を閉ぢた。（翠光記）

兼題「仁王さん」　路郎選

仁王さん僕の手相と似てゐるよ　凡々
仁王さん飛鳥の山も蝕きつらん　香林
そこのけ開屋と仁王は怒り給へども　遠見路
金網がなければ仁王あばれそう　草々
敗戰へ仁王の腕のやりどころ　晩甫
國訛り日毎仁王は聞きあきる　正治
仁王さんの横顔觀光寫眞展　つとむ
强盜の山分け仁王の前でする　白星
掴られてるともみてる仁王さん　水客
春日遲々として仁王さん眠くなり　白柳子
仁王さんけふも木枯寒う聽き

兼題「墨」　翠光選

モーニング着て墨をすらされる　栗
えんがつた墨にかつたれば使ひ　銀々
すりへつた墨で出産屆すみ　水客
開産して墨くろ〳〵と所につとし　鮎美
書初へ煙の灰がかゝる く落ち　亞鈍
借用證書をすてた墨をする　白星
御機嫌の變らぬうちに墨をすり　京介
履歷書へ母もそばから墨をすり　昌男
特選になつてうれしい墨のいろ　梧生
御料沙汰のせめて宛名は墨で書く　信二
表札も墨の厚さに住み古りぬ　裸木
墨痕淋漓として誤字があり　白星
鶯の聲へ墨する手がとまり　美朝
墨で書く手紙へ妻も來て座り　汐路
やつと墨すれて揮毫は筆をかみ　沒食子
當選へ墨する役も賜を立て　水客
墨かすれかすれて續く母の文　二十貫

兼題「圖書館」　方正選

青葉の野趣圖書館だけが知り　白星
圖書館の盡日計だけ鳴り響き　銀々
圖書館へ人室圖書館花も活ける　貞三
圖書館へ行くと云ふのにコンパクト　生々庵
圖書館の虫と云はれて職えなし　仙居
圖書館は通りへ尻を向けて建ち　晶平
淺んでる顔圖書館に覺えられ　芹柳
圖書館でて氣の合つたゲーテ組　つとむ
圖書館はひつそりとて込んでる　桂風
圖書館を出てから眼鏡の玉を拭く　淡舟
借金を逃げ圖書館で獨歩集　文蝶
圖書館へ苦學の汗のまゝ通ひ　草々
圖書館へ今日はあの娘が來てゐない　翠光
桃割が來て圖書館は煙草にし　路三
圖書館を出てインフレの星月夜　白星
紙魚のやうに圖書館員が首を出し

兼題「鹿」　月南選

社務の子鹿と一緒に育てられ　竹莊
インフレへおぢちやの鹿も値が合はず　松夢

若夫婦我が子のやうに鹿も入れ　系之助
こちら向く鹿に讃題は奈良の春　と草
一人旅仔鹿の側で草に寝る　鮎美
倖せな鹿は寫眞に残される　小松園
やるものがないから鹿を撫でてやる　翠光
辨當へ浮浪兒が來る鹿が來る　仙居
(人)ジープにも鹿にも慣れて奈良に住み　水客
(地)奈良版は鹿と撮られる時の人　正則
(天)鹿の首カメラの邪魔をしてもよし　亞鈍
(軸)アメリカの便り嬉しい奈良の鹿

兼題「人力車」　凡々選

人力車降した後は顎で引き　喜代志
身の上を上から車夫に聞く寒さ　汐路
人力車今はリックの客を乘せ　香林
醫者乘せて人力寒く待たされる　天弓
嫁入にせめて人力呼んで來る　普天
日本の名所が殘す人力車　正治
人力車明治の音をたてゝ來る　轉太
人力車こゝの角から向ひ風　汐路
つま先で上げる梶棒あぶれたり　栞
車屋に聞けば悴は運轉手　三星子
衝立のある玄關につくるま　白柳子
梶棒を降して車夫の無表情　つとむ
くじ引のやうに人力一つ出る　京介
人力車總あげにした御祭　文女
(人)餘生など滅相もない人力車　翠光
(地)ブツチヤケルように人力降される　京介
(天)老車夫へこの坂少し歩きませう　生々庵
(軸)梶棒へ力を入れるワンダフル

—席題「初詣」沒食子選、「晴着」香林選「スナップ」小松園選、「奈良の宿」白柳子選、「若草山」鮎美選は次號に發表—

川雜　**濱寺支部一周年句會**

十二月廿一日　於　諏訪森會館

鼠・餅・ランプ・奇蹟・
空繻・夢

配給を鼠も共に待つてゐる　松山
根氣よく今夜も同じ鼠らし　生々庵
ねずみまで喰べましたよと復員者　とし代
ねずみも知つてる闇屋の台所　美奈子
鼠捕りいつそ開けたのかと思ひ　小松園
引汐に乘つてねずみが一つ浮き　洞人
營團の鼠なんば粉など喰べず　豆秋
人間の智惠に鼠はひつかかり　傘人
ねずみにも鼠の智惠の死んだ眞似　万的
賣食ひの藏を鼠も淋しがり　祝平
新築へ移ればねずみ先に住み　圭井堂
子歳でも俺はコセ〳〵せぬつもり　同
一匹のねずみが恐い新世帶　竹莊
衣類まで喰はずば無事でゐた鼠　陽人
ねずみまであいをつかす暮しなり　幽王
なぐさめのうちに鼠の音もあり　倍二
老人が一人と見たか鼠が來　路郎
疎開してこれがお餅になる米か　古方
妻の里へ餅を貰ひに妻をやり　好郎
椽側の餅も舊家の廣さなり　倍二
瀬戸物と知つて鼠も近よらず　千舟
嫁の來た年の餅つき派手にする　祝平
思ひ出は吹雪の故郷のお餅つき　美奈子
やりくりがついたか餅の音がする　文蝶
たけのこへ隣で餅を燒く匂ひ　豆秋
小包の餅がゆがんだまゝで着き　緑雨
お隣のきれの音何と子を說かん　理
餅一臼助けて老はかくされず　好郎
ランプ屋の暴利を首相御存じか　陽人
停電へ話が見えぬランプつけ　松夢
ランプの下政令違反の酒がでる　好郎
紅葉も露伴も生んだランプの灯　祝平
ランプよしはゝ若かりし頃語る　幽王
こゝ切なはれ姑はランプの芯切つて見せ　とし代
ランプの灯ホントの母の姿なり　生々庵
ランプから明治の頃をなつかしみ　香林
ランプにして讃美歌續けられ　竹莊
巣鴨ではランプの夜を知らぬだろ　松夢
ランプの灯フト物凄い顏になり　淡舟
夜があけてからのランプは邪魔なもの　豆秋
英靈へ母は奇蹟をまだ願い　好郎
奇蹟信じた人が巣鴨にゐるさうな　吉比
奇蹟的成功男をぐつと上げ　美朝
未歸還の奇蹟を祈る朝詣　千舟
生還は奇蹟の二字に物足らず　圭井堂
生活苦奇蹟信ずる氣にもなり　百生
奇蹟々々百万圓の顏になり　文蝶
連續の奇蹟邪敎となりにけり　倍二
寢台で語る奇蹟に記者も來る　祝平
空壜を嫁入道具に添えておき　生々庵
お隣へ壜もあづけて共稼ぎ　千舟
且那はん可愛や空壜持たされる　吉比
空瓶はあれさかなしきサラリーよ　とし代
酒やめて久し空壜だけ殘り　陽人
配給の日まで空びんころがされ　圭井堂
空壜の雫疑問のまゝに貸し　祝平
空壜の中に佗しき藥びん　傘人
俺の夢知つてか鳶が輪を描き　生々庵
夢の話子供子供で負けてゐず　万的
新妻の夢を四邊が聞きたがり　小松園
父歸る夢を子供は信じきり　文蝶
大將になる夢一つ減つてゆき　とし代
夢いつか故郷の景色になつてゐる　淡舟
誰か夢なき百万圓の籤を買ひ　古方

雜川　**出雲支部句會**

一月廿四日　於　梅野悅朗居

片山内閣・母・工場・鼠

ヤミ撲滅を願う大衆だ片山さん　滿雄
民衆の負担が重い社會主義　悅朗
母に肩叩いて貰う四十過ぎ　さわだ
三十年いつか工場と共に老け　同
工場も俺もしみ〳〵二十年　緑之助
どぶ鼠大きく聲をびくつかせ　同
生活苦鼠の音も氣にならず　虹路

雜川　**久賀支部句會**（山口縣）

十二月五　於　路三居

馬鹿・吹殼・春中・
殺人・路

惚れてから馬鹿げた話も聞いてゐる　路三
新圓の人のもうけをはじいて見　來駕
馬鹿になりきつて小金ためてゐる　三休
どうせもう喫〈ねすいがら踏みにじり　同
吹殼も人それ〴〵のくせを見せ　路三
吹殼をソツとしまつたモーニング　白齊
若節二十年をリックにせをつて來　浦東
人殺し程にわめいて裏長屋　三休
路ばたの花を手折るも女の子　亞人
卒業はしたが進路は定まらず　露人
此の路がせまいとばかり優勝旗　路三
路ばたへ茶碗の店の出る夜店　水郷
みちのりは三十分です分讓地　朗々
ふみにじる路傍の草に吾を見る　路三
行く道は無駄を承知と生きのびる　三休

千石莊川柳會（貝塚）

十月二十四日　於　文芸會所

外交・眞心・雜

外交が下手で會社をクビになり　初甫
外交につかれ軍靴は石を蹴り　稔一
まごゝろにたゞ泣いてゐる交番所　周太郎
まごゝろへ癒えねばならぬ飯をかみ　黃波子
病みてよりシーツの白き幾日ぞ　初甫
木登りをしてたあの子も母となり　黃波子
お茶だけでいゝよ〳〵と恩師なり　庸司
晩學の辛さカンテキあほぎ馴れ　康彥
嫁の苦をカンテキだけが知つてゐる　紫苑
子が遣ふて來るカンテキのあわてよう　庸司
手術台遠いラヂオを聽いてゐる　同
外科醫から見れば切り度い患者なり　梵鐘
死にたいと云つたと手術後の笑ひ　稔一
催促のさ中にボン〳〵時計鳴る　阜月
催促にきまりの惡い酒があり　小鮎
ぢんわりと催促らしい話し振り　庸司
醫は仁術にあらず三千圓の注射　同
男性と女性は仲よくなるものよ　龜代志
のむ白湯に似て追憶の味氣なし　康彥
ラブの眞似までしてゐる子の遊び　光代
失せぬ根性を輸出でさらけ出し　梵鐘
療養所生き殘りだけで御目出度ふ　周太郎
おとなりも世間をしのぶ職でたべ　光代

（九ページのつづき）

鐵のカーテンはもう取り拂ひます。どうか今迄の數々の御無禮をお許し下さい。

末筆になりましたが奥様はお元氣でせうか。奥様も最近余り作句されない様ですが雜誌でお見受けすればやはりずつと上野にお出での様ですね。私この頃子供等の寝顔を見るとすぐ將來を考へます。それは極めて近い様でもあり又遠い様にも想ふのですが、もう五年私が生きていれば、長男が十三で次男が十二、三男が九つか。もう十年生きていたら長男が十八で二男が十七で三男が十四、十五年生きられたら二十年生きられたらとそんなことばかり思つて眠れぬこともあります。先生は最近豆ランプを入手されたそうですが寝るより他に用のない私は最近ローソクも無く消えたら消えたまゝです。先生の玉句に「浪花節情報あわや眞二つ」と云ふのがありましたが最近のあの停電では浪曲も落語も話の泉もめちやくちやであつて眞二つと云ふ感じではありません。實は「停電は話の泉眞ツ二ツ」と置きかへて見たのですがかいもくです。あれはやはりあの頃のさし迫つた時、ブーと云ふブザーに虎造が斷たれ、中部軍情報と來たあの感じでこそ眞二ツがピンと來るのだと思ひました。

とりとめもなくながゝと一氣にこゝ迄書きましたがまだ〳〵つきそうにありませんので今日はこのへんでペンを置きます。

先生私は明けて三十五になります。先生のお元氣がつく〴〵うらやましいです。

（二十二年十二月二十七日）

不朽洞會から

▼古川麗花麗氏（ホノルル）のこと。一月廿五日附の朝日新聞に「昨春以來愛知縣下の病院や各種収容所にはる〴〵ハワイからお砂糖の贈り物が屆けられ薄幸な人々を感激させていたが、贈り主は小包に書かれた「ホノルル市スズキ」とだけしかわからなかつた。そこで愛知縣當局でも八方手を盡して調べていたが、このほどホノルル市エマーソン街ジョージ・K・古川氏から名古屋の知人にあてた手紙によつて、この贈り主が年若い四人姉弟であることがわかつた」と云ふ記事が鈴木一家の寫眞を入れて詳細に報じられてゐるが、右記事中のK・古川氏と云うのが川柳雜誌社ハワイ支部の幹事であり、わが川柳不朽洞會の維持會員である古川麗花麗氏その人であることは興味が深い。▼一月十一日本社の新春句會の散會後、路郎主幹と香林、紫香の三氏は鐵道病院に正本水客氏を見舞はれた氏の病態は次第に快方に向つてゐられた由▼岡村路三氏は一月十三日來洞され路郎主幹と歡談された▼路郎主幹夫妻は一月十五日上野市丸の内の八木辰子さんを訪れ柳談をされた▼路郎主幹は一月廿八日、大阪遞信病院從業員組合文化部で講演をされた演題は「裸になれ」▼石會根民郎氏（松本）は信陽新聞の一月十八日號に「鼠のユーモア」を一月廿四日號に「寶くじと古川柳」を執筆▼路郎先生は山陽朝報の柳壇を担當されることとなつた▼上田翠光氏（奈良縣宇陀郡三本松村向淵）は奈良日日新聞の柳壇を担當せられた。雜詠を同氏宛に送られたい▼橋本綠雨氏（大阪）は多年支持して來た大阪交通局川柳會が近時活氣を呈して來たので二月八日午后一時から天王寺運輸假泊所で二月例會を催された當日は路郎先生の川柳講話があつた▼福田山雨樓氏（横濱）は昨年「番傘」誌が募集してゐた「川柳の定義」に應募、入選された▼吉田溪堂氏（堺）は圭井堂と改號された▼正會員山根梟人氏（松江）は一月から維持會員として一層精進されることとなつた▼中島生々庵博士（本會理事長）は二月二日から大阪市南區三休橋南の辻西で診療を再開されることになつた。中島小兒科診療院の診察時間は午前九時から正午までで日曜は休診とのこと▼宮田不二氏（北海道）から永山文化聯盟で川柳會を創めたところなかなか熱心だと云ふ快報に接した▼福田妄夢氏（大阪）は二月四日に華燭の典を擧げられたお欣び申上げる新居は阿倍野區阪南町西一丁目五二山口秀峰方▼小西無鬼氏（兵庫縣篠山）は毎月社の會誌で川柳を蒐集されてゐる▼夷一笑氏（姫路市）が二月五日に來洞された▼濱田久米雄氏（岡山縣）は勤務先の廣鐵岡山管理部内に文化サークルが出來、二月七日に川柳部門の會を開かれ川柳の起源や作り方等に就て講演をされる由▼山根梟人氏は二月六日、令息同伴で來洞され路郎師と半日の歡談をされた▼吉田永車氏（名古屋）から中西おさむ氏の住所が判つたといふ快報に接した▼敗戰後既に三年が經過したのに、不朽洞會員でまだ住所が不明な方がある。戰死された方も一、二あるらしい、いつまでも生死不明のまゝで据え置くのもどうかと思うので、この三月末でそれ等の人たちを會員の資格を停止または削除することにして、四月號に會員の決定判を發表したいと思つてゐる。住所御存じの方は至急御一報が願ひたい。▼維持會員永田里十九氏（布施市）は十二月限、維持會員西川青美氏（兵庫縣）、維持會員仲本玄同子氏（大阪）は一月限、正會員淺田鴨水氏は二月限、何れも家庭の都合上退會されることとなつた▼特別會員井村寒浪氏（大阪）は一月から正會員に轉じられることとなつた▼各地に本社支部の設立の機が熟しつゝある際弘津柳慶氏（廣島縣）は目下竹原支部創設中であるとのこと氏の熱意の一日も早く酬いられることを祈つてゐる。

品質優良

ペン先・針ピン・セムクリツプ

立川ペン先製作所

上野市

柳人交歡

滋賀縣甲賀郡貴生川町内貴三三〇
北川春巣

大阪市旭區新森小路南三丁目後小路幸夫方
浪玲之介

協和精機株式會社
久島一甫
大阪市東成區大今里北之町一丁目五六三

西尾栞
大阪府中河内郡曙川村八尾木

六號室

▼片山内閣が僅に八ケ月で總辭職をした。まことにあつけない往生振りである。將棋なら角道をあけて間なしに駒を投げたやうな感じがした。私なんか川柳に手を染めてから四十五年、「川柳雜誌」の主幹をしてから二十幾年になるが、その間に一回勇退を申出たが容れられなかつた。一回辭職しやうとしたがこれ又許されなかつたので、そのまゝ今日に及んでゐる。明治天皇は伊藤博文に朕には辭職がないと云はれたそうであるが、私にも辭職がなさそうである。光榮と云へば光榮であるが、よい後繼者が出て我等の「川柳雜誌」に光彩を放つて呉れることも望ましいことである。▼帝銀の毒殺事件などがじやつきして、世相はます〳〵惡化するばかりだが、惡化すればするほど人間陶冶の詩としての川柳は人間生活に對して大きな役割を持つ譯である。文化々々とお題目を稱へてゐるばかりが能ではない。ウンと協力が願ひたい。▼前號は素晴しい反響があつたので編輯部はます〳〵張切つてゐる。▼表紙はランプ時代の象徴で田村孝之介画伯を煩はしたもの▼本號の内容は前號に比して遜色のない出來榮なので一層の好評を疑はない。不朽洞會員の「川柳新大阪」(句)、富士野鞍馬氏の「柳樽の選者和笛」福田山雨樓氏の「句評の生理」夷一笑氏の「沈默の一年」東野大八氏の「愛媛柳人記」等々好讀物の滿載である。拙稿「綴川柳講座」は十四字詩と慶弔句に就いて筆を執つた御愛讀が願ひたい。▼本號も記事が輻輳して、沖野岩三郎氏の「淺間の煙」は次號へのお樂みとした▼三月の本社の會は七日(日)の午後一時から例の一運寺(阪堺線住吉交叉東一丁)で開催する。特に支障のない限りは第一日曜に開くことにしてゐるので案内が郵便事故で遲くなつても誘ひ合はしてお出かけを乞ふ。

募集

毎號募集(毎月五日締切)

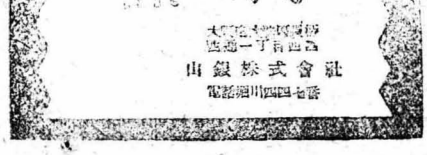
近作柳樽(雜吟句)麻生路郎選
川柳塔(雜詠)麻生路郎選
文章・評論・研究・(感想其他)

投稿規定

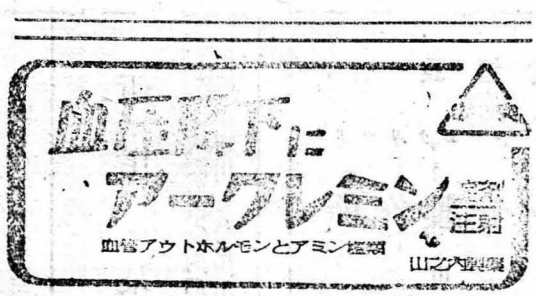
▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

―動靜―

▼本社の新春句會は一月十一日午後一時から一運寺で開催、川柳人の餘興があつて新春らしい朗らかな集りであつた▼既報の川柳むつみ社と本社大和支部共催の奈良縣下新春川柳大會は一月四日奈良市佐保會館で開會盛會であつた(會報參照)▼交通局川柳會は一月九日緣雨居で開催された▼大阪遞信病院川柳會が一月十四日午後二時から開催され新春句會なので相撲吟や福引で賑やかな集りだつた▼川雜濱寺支部の新春句會は一月十日松夢居で開催▼南海電鐵親和倶樂部川柳會が同社の四階で一月二十一日午後四時から再開され本社から路郎主幹と中島生々庵氏が出席した▼扶桑會屬文化部川柳會が一月廿二日午後四時から開催され路郎主幹出席▼千石莊川柳會は一月廿四日午後二時から路郎主幹を迎えて開催▼本社二月例會が一日午後一時から一運寺で開催された▼月刊趣味社(京都)では二月十一日午前十時から佛光寺會館(東洞院佛光寺下ル)で一周年記念の川柳大會幷びに藝能大會を開催されるとのこと、本社からは路郎主幹と潮花、鳩花の兩氏が出席の筈▼西村曲豆氏は堺市蹞尾宮本町二〇九六ノ一へ轉居▼津田千舟氏は大阪市住吉區墨江西六ノ九九、谷幾造方へ移居▼川柳山脈社は靜岡市追手町七六竹谷氏方へ移つた。同編輯部は靜岡縣志太郡和田村北新田三一四ノ一小泉敏夫氏方▼姫田夕鐘氏(德島縣)は勤務先の木材會社の所用で月の二十日間は山で暮してゐられる由▼川柳雜誌社濱寺支部の山中大佛園氏が一月五日に長逝された。行年七十八歳。令息の追憶の一節に「令禰の和尙幡に眞赤なネクタイは父のシンボルだつた」とあるが、迚もモダンな奇人だつた。路郎主幹は「極樂でするステップの踏みごこち」生々庵氏は「お淨土で又あの帽子のし歩き」の追悼句が故人のお人柄を髣髴とさせてゐる▼米村あん馬氏(松江)は川柳生活半年を記念するため句集刊行を計劃目下句の整理をされてゐる由▼小畑自由朗氏(兵庫縣)は半年振りに鄕里へ歸つて百姓になつてゐるとのこと▼西村佳唱氏(函館)は引揚后漸く函館旭中學校内に落ちつかれた由▼渡邊曉蛍氏(愛媛縣)は四女を儲けられたのことお欣び申上げる▼福岡の速水眞珠洞氏還曆記念の出版、現代川柳著名作家隨筆集「泉」がいよ〳〵出來たと肝煎役の大神梨雨江氏から快報に接した▼種瓜平氏は大阪府中河内郡大戸村上石切三六ノ居を移された▼方寸印會・富樫休軒先生が風韻ある篆刻作品を川柳人のために特別の潤刻料でやつてやらうと云はれてゐるので御希望の方は本社サービス部まで申込まれたい。雅號印(四分角三字以内、細長、小判形も同じ位の大きさで一顆印材共金二〇〇圓)藏書印(八分角、四字以内、一顆印材共金三〇〇圓)代金は申込と同時に小爲替で。



そごう
大阪
そごう卸商品館
十合商事株式會社
肥後橋交叉点
そごう難波店
地下鐵なんば
そごうアベノ店
上町線終点前
そごう
梅田食品市場
大阪驛東隣
そごう
百貨更生デポー
大阪驛前



B列5號 毎月一回一日發行
川柳雜誌 第三卷 第二號
一冊 金十圓(送料五拾錢)
半ケ年概算 金六五圓
一ケ年概算 金一三〇圓
昭和廿三年二月廿五日印刷
昭和廿三年三月一日發行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
編輯兼發行人 麻生幸二郎
印刷人 大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
發行所 川柳雜誌社
振替口座大阪七五〇五〇